

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-153	13-050	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Relations among stress, coping strategies, coping motives, alcohol consumption and related problems: a mediated moderation model. ストレス、対処法、対処動機、アルコール消費、およびその関連問題の関連		
執筆者		
Corbin WR, Farmer NM, Nolen-Hoekesma S.		
掲載誌		
Addict Behav. 2013 Apr;38(4):1912-9. doi: 10.1016/j.addbeh.2012.12.005. Epub 2012 Dec 16.		
キーワード		PMID
アルコール、ストレス、対処		23380486
要 旨		
<p>背景： ストレスが飲酒の動機となりアルコールの乱用につながるということは良く言われるが、ストレスとアルコールについて関連を検討した研究報告はまだない。難しい問題を抱えた個人が飲酒以外に効果的な対処法がないことを主な理由として、ストレスは多量の飲酒を促し、また関連問題(例：飲酒によって宿題やテスト勉強ができない)とも関係する。</p> <p>目的と方法： この仮説を調べるために、飲酒およびそれに関連する問題の予測因子またはストレスと飲酒の間の緩衝材として、4つのストレスへの対処行動(能動的対処(例：問題を取り除くために余分な行動をとる)、計画(例：立てた計画からそれないよう努力する)、競合活動の抑制(例：集中するために他の事をやめる)、自制(例：慌てることでより状況が悪化しないよう気を付ける))について、225人の大学1年生を対象に調査した。さらに我々は対処行動の効果の媒介物である飲酒に対する対処性動機(嫌なことがあり、気分を紛らわそうとする動機)について調べ、対処行動自体によるストレスについても検討した。</p> <p>結果： 分析結果では、飲酒の原因となるストレスの影響の緩衝材として自制と競合活動の抑制の両方が支持されたが、関連問題についてはそうではなかった。自制自体によるストレスもまた対処性動機の予測に関して明かであり、対処性動機は毎週の飲酒とアルコール関連の問題の両方で高レベルに関連した。結局のところ、飲酒に対する対処性動機は毎週の飲酒制限それ自体によるストレスの緩和に役立った。</p> <p>考察： これらの結果よりストレスに直面した際の衝動的な反応としての競合活動の抑制と自制は、高校から大学への移行期の大量飲酒の危険性を低下させることを示唆している。</p>		